



びわ湖芸術文化財団・舞台芸術情報誌

Contents

『アッシジの聖フランチェスコ』..... P2・3
 2日連続の歴史的公演&ジルヴェスター・コンサート... P4・5
 みんなおいで!子ども楽しめる公演 P6
 秋・冬Pick up!!..... P7
 リレーエッセイ「Road to Biwako-Ring」..... P8
 びわ湖ホールインフォメーション P9
 えいじゃに P10・11
 劇場・舞台芸術の力 P12



『びわ湖ホールジルヴェスター・コンサート2016-2017』より

特別公演

メシアン 作曲 歌劇

全曲日本初演

アッシジの聖フランチェスコ

Saint François d'Assise

全3幕8景 演奏会形式
フランス語上演・日本語字幕付

20世紀後半を代表する大作オペラ、日本初の全曲上演に挑みます

これまで日本では部分的にしか演奏されていなかったメシアン唯一のオペラ、4時間以上を要する空前の規模の作品を全曲上演します。9人のソロ歌手、40近い打楽器、3台のオンド・マルトノ、10パートからなる合唱など、総勢約240名にも及ぶ大編成。オーケストラは、今年創立55周年を迎えた読売日本交響楽団。合唱にはびわ湖ホール声楽アンサンブルも加わり歴史的上演に挑みます。

Topic.01 作品

メシアンが作曲した唯一のオペラ



オリヴィエ・メシアンが作曲した唯一のオペラで、聖フランチェスコの奇跡を描いた宗教的大作。中世イタリアのアッシジに実在した修道士、聖フランチェスコを題材とし、フランチェスコが信仰に専心後、奇跡を体験し、聖痕(キリストが十字架に架けられた際にできた傷と同じ印)を得て死ぬま

での半生を、大編成のオーケストラで壮麗に描いています。アッシジに集まった世界中の鳥たちと会話を交わしたとされる聖フランチェスコの数々の奇跡をたどります。

作品をより深く楽しむために

オペラ講座「アッシジの聖フランチェスコ」(全2回)

公演に先がけ、メシアンと親交のあった船山 隼と、本番を指揮するシルヴァン・カンブルランによる全2回の講座を開講。

■ 9月24日(日) 「音と光と色彩と自然の織りなす新しいオペラ空間」
~20世紀音楽の巨匠としてのメシアン~
講師: 船山 隼(東京藝術大学名誉教授)

■ 10月21日(土) 「カンブルランが語る アッシジの聖フランチェスコ」
講師:シルヴァン・カンブルラン(指揮者) 通訳あり

開講: 各日14:30~16:30 会場: コラボしが21 3階大会議室
2,000円(2回通し券) 1,500円(1回券・当日券のみ) 自由席

『アッシジの聖フランチェスコ』

11月23日(木・祝) 13:00開演【大ホール】

台本・作曲:オリヴィエ・メシアン 合唱:びわ湖ホール声楽アンサンブル
指揮:シルヴァン・カンブルラン 新国立劇場合唱団
管弦楽:読売日本交響楽団

出演: 天使 / エメーケ・バラト、聖フランチェスコ / ヴァンサン・ル・テクシエ
重い皮膚病を患う人 / ベーター・ブロンダー、兄弟レオーネ / フィリップ・スライ
兄弟マッセオ / エド・ライオン、兄弟エリア / ジャン・ノエル・ブリアン
兄弟ベルナルド / 妻屋秀和、兄弟シルヴェストロ / ジョン・ハオ
兄弟ルフィーノ / 畠山 茂

SS席16,000円(15,000円) S席14,000円(13,000円) A席12,000円(11,000円)
B席10,000円(9,000円) C席9,000円(8,000円) D・E席完売
U30席(30歳以下) 3,000円 U24席(24歳以下) 2,000円
()内は友の会会員料金

Topic.02 指揮者・カンブルラン氏メッセージ

恐怖が喜びに変わっていく“一つの旅”

このオペラは、私の心の中で大変大きな位置を占めるものです。もう24回も指揮をしてきましたが、毎回必ず魔法が起きると感じています。伝統的なオペラ作品とはかけ離れた作品です。メシアン自身がクリスチャンで、信仰心の篤い人だったこともありますが、自然の表現が実に特徴的です。

まず鳥に語りかける。メシアンは鳥の声に魅せられていて、一生を通じて世界中旅して、様々な鳥の声をコレクションしました。それを、自分が作曲する際に、忠実にオーケストラに再現させました。このオペラの中には、鳥の鳴き声だけでも60種類以上が登場し、それぞれに重要な意味があります。

オペラの最初に登場するセリフは、聖フランチェスコの弟子の一人が言う「怖い、私は恐れを感じている」です。このオペラを一つの旅とみなすと、最初に恐怖が登場し、次第に怖さが薄れて行く。そして最後は、全てが喜びに変わります。

曲が進めば進むほど、聴き手の皆さんが曲の中に引き込まれて行くのが、手応えとして伝わってきます。



シルヴァン・カンブルラン



読売日本交響楽団



びわ湖ホール声楽アンサンブル



エメーケ・バラト Zsófi Ra ay



ヴァンサン・ル・テクシエ DR

Topic.03 コラム - 色彩 -

『メシアンの色彩感覚』

色聴(共感覚)

メシアンは『リズム、色彩、鳥類学による作曲法』の第7巻第3章の冒頭で、次のように述べている。「私は音楽を聴く時、いつもそれに対応する色彩が見える。また楽譜を読む時も、それに対応する色彩が見えるのである。」

このような複数の知覚現象を「共感覚」という。中でも音から色が見える場合を「色聴」といっている。

メシアンの色聴はかなり具体的で複雑なものだ。『メシアン その音楽的宇宙』のなかで、彼は次のように語っている。「音楽を聴くと、音の複合体に相応する色彩の複合体が私の中では見えるのです」私の諸和音は色彩です。和音は頭脳に色彩を発生させ、色彩は和音と共に進展するのです。メシアンの音楽は アッシジの聖フランチェスコ に限らず色彩的だが、それは彼の色聴に負うところが大きいだろう。

〈アッシジの聖フランチェスコ〉の色彩

アッシジの聖フランチェスコにおける音色彩は編成において管弦楽の他、120人の混声合唱に加えて5群の打楽器、5種の鍵盤打楽器、3台のオンド・マルトノなど、他に類を見ない多彩さだ。特に鳥たちの大合唱となる第6場(第2幕)は、初演を指揮した小澤征爾が楽譜を見るなり「演奏不可能」と言ったほど複雑だが、聴いているだけで万華鏡のように輝く。

しかし、アッシジの聖フランチェスコの音楽の様々な主題や場面が

何色であるかは、私も含めて色聴のない人々には分析によってしか分からない。

アッシジの第1幕はヒバリの鳴き声で開始するが、これは『作曲法』第5巻によれば、ほぼチョコレート色といえる。また、中心となる「聖フランチェスコの主題」は全体の音を総合すると、メシアンが構成した48種の固有な和音番号の12 Dの和音となる。それは「真っ白い雪の上で輝く金色の太陽」の色なのだ。この曲の中心となる人物に「輝く金色の太陽」の色彩を当てたところに、メシアンの聖フランチェスコへの想いが伝わって来よう。

メシアンは アッシジ について「私が自分の音楽、和声や音の複合体やオーケストラに色彩を籠めておいても、聴衆には何も見えないのが残念です」と述べているが、私達は色彩は見えなくとも、その色彩的に輝く万華鏡のような響きの連続を聴くことはできるのである。

(佐野光司:桐朋学園大学名誉教授)



アッシジの聖フランチェスコによる「小鳥への説教」
画:ジョット(1305年頃)

Topic.04 コラム - 楽器 -

オンド・マルトノってどんな楽器?



音頭丸殿? いいえ、電子楽器です

オンド・マルトノスピーカー



オンド・マルトノリボン奏法

オンド・マルトノは今から100年くらい前にフランスで考案された電子楽器である。

オンド・マルトノの演奏法は、二通りある。鍵盤を弾く方法と、鍵盤の前にはられたワイヤーをスライドさせる、リボン奏法。後者では、チェロのような、人の声のような、暖かみのある音が作り出される。メシアンを筆頭に、ジョリヴェ、オネゲル、近藤譲など「現代音楽」がレパートリーである。

電子楽器ではあるが、音の高さや音色を、奏者がリアルタイムで作り上げねばならない。

言葉で説明すればするほど謎が深まるであろう、この楽器。フランスの音楽美学者ジェル・ブルレが「魂を奏する電子楽器」と評したその音を、ぜひ生で体感していただきたい。

(大矢素子:オンド・マルトノ奏者)

Topic03、04は月刊オーケストラ 読売日本交響楽団発行 特集『アッシジへの道』より転載

